

第三百七十七回 青葉会

平成二十九年八月二十四日(木)

午後六時〜九時 築地「紅蘭」

〈顧問〉

☆ 川合万里子 先生

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

伊賀山そらお 今井紀久男 大林猛 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子 星田啓子

山田けい子 山内天牛

柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 中野一灯 古田昇 宮内規雄

山崎亜也 渡邊盛雄

赤田堅 楠田彦十 後藤保明 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明

MH氏 村田くに子 山本三恵

〈紙上選句〉

《互選句》

八点

◎ コスモスといふ寂しさを活けてみる

恵洲 (猛・孤・弘・龍・敏・允・正・啓)

五点

病む顔を孫には見せじサングラス

忠彦 (そ・紀・保・允・く)

☆ 秋日和サドルの高さやや上げて

孤舟 (万・五・千・正・M)

☆◎ 盆の旅山に向かひて揺拝す(諏訪大社の御柱)

五郎太 (堅・万・孤・彦・天)

(☆↓「揺拝」↓「遥拝」。はるかに遠いところから拝むこと。手偏でなくしんにゆう偏を用いること)

天草の海駆けぬけて星流る

けい子 (そ・五・弘・龍・三)

◎ たおやかに老ゆる師匠や女郎花

盛雄 (紀・孤・五・啓・く)

☆ みんなの声止(きみやがて赤児泣き

そらお (万・保・正・け)

大瑠璃や磴(とう)の急なる奥の院

紀久男 (五・允・け・三)

(円覚寺・白雲庵)

☆ 秋暑し競歩の聲(しり)のよく揺るる

孤舟 (猛・万・弘・三)

(☆↓「よく揺れる競歩の聲や秋暑し」)

☆ 筆跡にしのお人柄残暑見舞

全 (堅・万・そ・龍)

☆ 身に入むや読めぬカルテを覗き見て

全 (万・五・允・天)

☆◎ 岩頭に悟空の気分大雲海

一灯 (万・孤・敏・け)

(☆↓「西遊記」の中心怪猿)

☆ 盆船の二隻(そう)曳かるる波たかし

ゆたか (堅・猛・保・敏)

(☆↓「盆船」↓「盆舟」舟を使う。隻||セキ「一隻」複数は||ソウ「二隻」)

啓子 (万・五・弘・三)

レース編む天使の見えて百日紅

全 (弘・正・M・三)

☆ まといつく秋蝶消えて又一人

けい子 (万・龍・啓・天)

(☆↓「まといつく秋の蝶消え又ひとり」。一人||独りのほうが「孤独感」を際立たせる)

風盆の盆閨より人の沸き立てり

全 (紀・保・千・敏)

◎ 逃げ場なき少年の日々敗戦忌

盛雄 (紀・孤・啓・け)

(昭和二十年八月十五日 小生小学校四年生)

☆ 皮ごとの桃の実旨し八ヶ岳

?

皿洗ふ水心地良き残暑かな

そらお (保・龍・M)

☆ 汗見せぬ弓道場の所作の美(はし

紀久男 (堅・万・敏)

(☆↓「汗見せぬ弓道の所作美しき」)

☆ 食細り計報しきりの残暑かな

全 (万・允・M)

☆ そつとさよならけふ帰る茄子の馬

孤舟 (万・啓・け)

(☆↓「けふ帰る茄子(なすび)の馬よそつとさよなら」)

◎ 遠き日の恋の挫折や女郎花

健介 (孤・M・く)

混血の児のおすおすと踊の輪

堂哉 (正・啓・天)

◎ ひろしまの流燈の夜の闇深し

昇 (孤・敏・允)

猫覗く葉陰に逞し青葡萄

啓子 (紀・彦・三)

◎ よく餌(めし)をくふ食客(いそうろう)兜虫

天牛 (孤・啓・け)

三点

二点

☆ 縄文の遺跡の中の夏野かな (諏訪湖畔・茅野) 五郎太 (猛・万・彦)
☆ 江戸切り子と名付けし花火隅田川 天牛 (猛・万・千)

☆ 梅雨寒や重機動かず泥の上 さらお (紀・万)

(☆…三段切れになりそうなので語順を変えて↓「泥の上の重機動かず梅雨寒し」)
☆ パソコンの姉の遺影に裨る新盆 忠彦 (紀・万)

(☆↓「新盆の姉の遺影をパソコンに」)
生きるとは低き水音風の盆 五郎太 (彦・天)

◎ 回想のときは過ぎ行き処暑の風 全 (堅・孤)
☆ 雲よ来よ散歩の吾を覆へかし 猛 (万・龍)

(☆…無季。季語がない)
☆ 炎天下吟のお温習(まじ)い川流る 全 (万・紀)

(☆…吟||義太夫節の旋律型などを言う) (詩吟)
白萩や今日より縁(ゆかり)の寺となる 弘子 (紀・千)

☆ 雄弁の早起き鳥や秋の森 健介 (紀・万)

(☆↓「雄弁な早起き鳥や秋の森」)
☆ 片蔭を母の手を引き美容院 堂哉 (万・弘)

(☆…「片蔭」↓「片陰」。片陰||草冠はかげに用いない)
☆ 昼寝してもう白芙蓉閉じにけり けい子 (万・千)

無造作に石榴挿す壺魯山人 亜也 (紀・千)
無花果は皮ごと食べる戦中派 天牛 (彦・正)

梅雨明けて西日きびしき駅路かな さらお (く)
手作りの神輿町内一周(めぐり) 全 (く)

☆ 古都塔頭竜胆手向け献杯す 紀久男 (万)

(☆↓「竜胆を手向け献杯古都の塔」)
残暑押し本場のジャズに身を預け 全 (そ)

また事故か汗ククラクラと通勤者 猛 (紀)
☆ 夏雲や陽に焦がされて雨雲に 猛 (万)

☆ メロン着く量に溜息の老夫婦 忠彦 (万)

つむじ風ジャンヌの魂(たま)は夏空に 五郎太 (紀)

(ジャンヌ・モロー逝く)
☆ 戦終わる少年の日の碧き空 ゆたか (万)

(☆↓「少年の日の碧空や終戦忌」)
砂を噴く生き物の穴夏の浜 弘子 (そ)

やませ這ふ啄木捨てし南部領 一灯 (紀)
◎ 百万ドルの夜景を囲む星月夜 昇 (孤)

☆ 瑞々しき友の造りし胡瓜食ふ 規雄 (万)

(☆↓「瑞々し友の育てし青胡瓜」)
挽ぎ立ての胡瓜ぱりぱり齧りけり 全 (M)

夏の風邪癒えれば床屋夏休み 天牛 (彦)

粹と酔こよなく愛でし良夜かな 盛雄 (堅)

●次回青葉会

九月二十八日(木) 午後五時半〜八時半 文京区民センター

▲当季雑詠五句 投句二句

十月二十六日(木) 全

十一月三十日(木) 忘年句会

鈴木演芸場昼の部見物↓築地「紅蘭」

以上

平成二十九年八月句会報

一 今回は久しぶりのそらおさんら9名出席。投句10名。恵洲さんからのFAX：社友会HP特別企画（秋の風景写真を見て一句）に会員皆様の応募依頼を回覧。孤舟選者によれば句会当日までの応募はゼロ！の由（9月11日締め切りには20人50句余）。万里子先生からのお手紙。孤舟さんが代表の「爽樹」9月号（5月出版「川口襄集」の特集掲載）。小生の河東節開曲300年記念演奏会のチラシ（10月27日・歌舞伎座）も回覧しつつ猛さんの司会で開始。御覧のように恵洲さんが断トツの得点でした。

名古屋から出席のけい子さん寄贈の「龍神」（館林の純米辛口）と小生の純吟「義左衛門」（伊賀・青山）を賞味しつつ、10数年ぶりの築地「紅蘭」での暑気払句会。シエフの心尽し：ネタと味付けの妙味に絶賛！忘年会もここで催すこと即決しました。話題はジャズ好み、ロンドン・コネチカットの思い出。小川さん墓参（円覚寺）（長谷見敏さんと佐野俊一さん）と堀口康弘さん急逝のこと。アフカムラチロエサタ等々。

二 関係者近詠

九十二歳へ自然治癒期し梅青し	眞希子	母の日や満天の星みな潤み	孤舟
甘酒や助けてと言へる間柄	全	銀輪の列新緑の風となり	全
若牧師の説教の汗祝しあれ	全	蜘蛛の囀に月の雫の捕らへらる	全
袋角葉音へひくと耳立つる	弘子	―「爽樹」9月号	
山法師象舎に残る鉄の環	全	有難き鉄の鎖や登山道	正明
炎天の線路まつすぐ錆びてをり	全	高飛びの孤独なバーや天高し	全
巢作りへなほしなやかな小枝選る	全	いつの間に監視社会やこぼれ萩	全
横を向き鏡に直す夏帽子	全	ひたと打つ碁石（いし）のひびきも涼新た	允章
十薬の名を負うてゐて嫌はれて	青史	下町に運河幾筋鱸跳べり	全
保冷剤の湿りを背に薄暑旅	全	馴染みたる志野のぐい呑み衣被	全
青春の日々へ舳ひを解くヨツト	全	組む脚の赤きペディキュア夏惜しむ	堂哉
晩年のここに来たりて胡瓜揉む	全	蛸や日に日に細る友の声	全
初夏の句座新橋芸者天をとり	東紀	川床（ゆか）守る英語達者な若女将	全
夏帯の綺麗所と楽屋口	全	境内に入るやいなやの蟬しぐれ	千恵
―「森の座」9月号		温め酒目玉ぎよろりとお燗番	彦十
傘寿など幕下並よアロハ着る	盛雄	二条城開門を待つ蜻蛉かな	全
ゆつたりと遠出のつもり蝸牛	全	叔母おくる焼き場に群るるトンボかな	全
卓袱台を囲みし昭和や蚊遣香	健介	直裁にも言う人や冷奴	全
彫深きランドキヤニオンの大夕焼	全	帰省する満員バスに老一人	紀久男
鰻屋の丸に「う」の字の幟立つ	紀久男	残暑きつ漱石通ひし座禅堂	全
残暑中綺麗所の待つ句座へ	全	秋暑し墓前昼酒湯だりをり	全
―きさらぎ句会8月		（円覚寺・白雲庵）	

三 「爽樹」9月号の特集『川口襄集』より主な結社主宰の採り上げた句を列挙してみました。

中原道夫（「銀花」）	大輪靖宏（「輪」）
草履屋も和菓子屋も春神楽坂	冬の日を積み上げてゐる古書肆かな
王道の初夏へと展げ振り向かず	行方克己（「知音」）
アロハ着て道踏み外すには遅し	剪定の枝の温みを束ねけり
山田貴世（「波」）	能村研三（「沖」）
王道の初夏へと展げ振り向かず	古本の忘れ葉や釣忍
櫂の音に真菰の月のかかりけり	宮坂静生（「岳」）
蝶となり蒼茫の海さすらはむ	侏儒の声する紫陽花の毬の中